

140メートルスロープ橋 バリアフリー?

「うめきた」2期工事

「ここを使う人の声が届き、エレベーターの設置が決まって良かった」
 小川尚美さん(60)の長女 雅永さん(29)は脳性まひで、支線北側にある施設「大阪整肢学院」(大阪市北区)に通う。雅永さんは専用の車椅子を使っているが、自身の体重に医療機器や車椅子の重量などを含めると重さ40キロ超。スロープとはいえ、これまでの6倍超もの距離を移動するのは簡単ではない。

新設される歩道橋は、大阪駅から北へ約1キロにある東海道線支線をまたぐように計画。2023年までに支線が地下化されて「北梅田駅(仮称)」が建設されるのに合わせ、学院そばにある線路下の通路が22年ごろまでに閉鎖される。通路は生活道路として地元には欠かせない。現在は3〜18歳の約80人が入所し、成人ら約40〜50人が通うが、大半が自分で体を動かせず保護者らが重い車椅子を押す。約150メートル離れた広い道路は車両の交通量が多く危険だ。

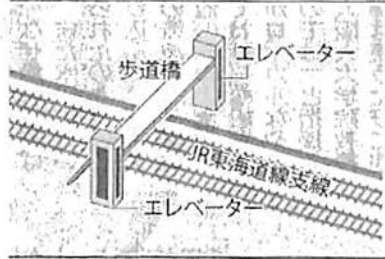
市は16年8月、スロープ



大阪市が計画した歩道橋



当初の計画例



エレベーター設置に変更後の計画イメージ



吉村洋文市長は同日、計画の再検討を担当課に指示。現在はエレベーターを整備する方向で計画を練り直している。実際の建設はまだ先だが、市建設局は「意見を全て反映できる」とは言いにくい。今後とも要望があれば話は聞きたい」と説明する。

小川さんは「市にはバリアフリー社会実現のためにも、計画段階から利用者の意見を聞いてほしかった」と言う。約50年前から近所に住む主婦の田畑裕子さん(71)は「手押し車を使うお年寄りや普通の道でもこげそうになるし、スロープは下りが怖い。病院もスロープも全て線路の反対側にあるのでエレベーターはありがたい」と話す。

当事者参加を

国の交通バリアフリーのガイドライン作成に携わった三星昭宏・近畿大名義教授(バリアフリー工学)の話。そもそも歩道橋計画の中にバリアフリーの考え方が入っていないのがおかしい。まちづくりに必要なのは、当事者参画の仕組みと意識だ。バリアフリーを含む都市計画は、障害のある当事者を除いて策定することは許されない。当事者も参加し、一番厳しい条件の人に合わせて設計をしていくべきだろう。

現通路の6倍超

利用者「障害者へ配慮欠く」 大阪市、計画変